

海外特別研究員最終報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

採用年度 平成 29 年度

受付番号 757

氏 名

三野 和恵

(氏名は必ず自署すること)

海外特別研究員としての派遣期間を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。

なお、下記及び別紙記載の内容については相違ありません。

記

1. 用務地 (派遣先国名) 用務地: エディンバラ (国名: 英国)
2. 研究課題名 (和文) ※研究課題名は申請時のものと変わらないように記載すること。
植民地主義を問うキリスト教思想の可能性－東アジアのイギリス人宣教師に着目して
3. 派遣期間: 平成 29 年 6 月 1 日 ～ 令和 元年 5 月 31 日
4. 受入機関名及び部局名
Centre for the Study of World Christianity, the University of Edinburgh
5. 所期の目的の遂行状況及び成果…書式任意 **書式任意 (A4 判相当 3 ページ以上、英語で記入も可)**
(研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等)
(注)「6. 研究発表」以降については様式 10－別紙 1～4 に記入の上、併せて提出すること。

I. 研究の背景

報告者はこれまでに、19 世紀末から 20 世紀半ばにかけてのキリスト教・プロテスタント海外宣教運動における「近代性」の問題に焦点を当てながら、思想・信条における排他的自己認識、及びその克服の可能性を考察してきた。「近代性」の概念は、かつて欧米植民地帝国による他民族支配や、キリスト教宣教における宣教師と現地人改宗者との間の差別的関係性を正当化した。また、同概念は現代においても、欧米自由主義諸国、及びその文化を肯定的に受け入れる「先進国」と、その支配的影響力に対抗すべく排外的民族感情や宗教原理主義に訴える動きとの間の分断状況を生み出し続けている。こうした状況の中で、多くの場合、日本を含む非西洋世界に欧米列強の「近代的」政治・教育制度と共に到来したキリスト教も、それが「欧米的＝正統的近代性」の体现者であるのか、あるいは現地社会への「土着化」を経なければ真の「近代化」には貢献し得ないものであるのか、という争点に限定されながら論じられる傾向にあった。とりわけ、東アジアの思想史界では、キリスト教には、欧米からの「作用」とそれに対する「反作用」を迫られる非西洋世界という、一方向的な影響関係のイメージの問題が、常につきまわってきた。

以上の問題を具体的に考察するため、報告者は日本植民地支配下台湾 (1895-1945) におけるスコットランド人宣教師キャンベル・N・ムーディ (Campbell N. Moody, 1865-1940)、及び同時代の台湾人キリスト者らが、その相互関係の中でいかなる思想を形成していったのかを捉えてきた。ムーディは、所属宣教団体である台湾のイングランド長老教会が医療・教育、教会組織の維持・運営に重点を移行した後も、街頭説教・宣教拠点巡回など、対人的な関係の中でキリスト教について語る説教活動を意識的に展開した点で特異である。報告者は、このムーディが台湾、及びごく短期間ながらも異動により赴いた英領マラヤ・シンガポールでの宣教経験に基づいて著した、多数の英文・白話字 (閩南系台湾語のローマ字表記) 宣教文書を包括的に検討し、彼の宣教論とキリスト教論を追ってきた。同時に、報告者は彼と直接的に関わった林学恭 (1857-1943)、廖得 (1889-1975)、林燕臣 (1859-1944) を中心とする台湾人信徒・聖職者らの教会形成論や教会自治運動を分析し、これらの人物とムーディの相互関係を考察してきた。こ

これらの作業により、報告者は派遣開始前までに以下の三点を明らかにしてきた。第一に、ムーディが台湾及びシンガポールでの宣教経験を通し、日本だけではなく、大英帝国を含む「文明国」による植民地支配や「西洋的近代」と癒着したキリスト教像、宣教師による現地人改宗者への主導・監督が自明視される状況を批判的に問うたこと。また、このことで彼が日本植民地下台湾という歴史的な文脈抜きでは語ることのできないキリスト教思想を形成したこと。第二に、台湾人キリスト者らが、キリスト教という外来思想を批判的に受け止め、内在化しながら、「台湾人キリスト者」独自の宣教使命を持つ集団としての自己認識や、台湾人の人格的・政治的解放を構想していたこと。そして、第三に、これらの思想的作業が、両者の双方向的影響関係の中でこそ可能とされたこと、である。

II. 研究の課題、方法及び内容

以上のように、報告者の派遣開始前の研究では、日本植民地下台湾におけるムーディと台湾人キリスト者らの思想的相互関係の検討が中心であり、その背景である大英帝国におけるイングランド長老教会の位置づけ、及び台湾宣教に参入する以前のムーディの思想形成への考察は課題として残されてきた。このため、報告者は派遣期間中には、近代イギリス社会の思想的コンテクストにおけるムーディの位置づけをより詳細に検討することを目指した。具体的には、(1) ムーディのスコットランド人としての背景、特にスコットランド自由教会 (Free Church of Scotland) の信徒・神学生・聖職者としての経験、及び(2) 19 世紀末から 20 世紀初頭に高まった「信仰宣教 (faith mission) 主義」— 宣教においては直接に「信仰」を伝えるべきとする立場— が彼に及ぼした影響、という二つの要素を考察することを目指した。これら二つの作業により、ムーディの事例の意味を 19 世紀後半スコットランド、及び大英帝国の社会史的・思想史的背景や、キリスト教海外宣教運動の動向を含む、世界史的な文脈を踏まえながら明確化することを研究の課題とした。

A. スコットランド自由教会信徒としての「二重の周縁性」と教会自治に対する考え

上述のように、ムーディはスコットランド自由教会という長老派の教会に属していた。長老派とは、小会 (Kirk Session)・中会 (Presbytery)・大会 (Synod)・総会 (General Assembly) という、聖職者と信徒代表から成る段階的な自治的合議体によって教会を組織するプロテスタントの一宗派である。スコットランド自由教会の創設経緯は、この長老派思想における教会自治への重視と深く関わるものであった。同教会はスコットランド国教会 (長老派) の一部の信徒と聖職者らが、1843 年に同教会から分離・独立することで創設したものである。「大分裂 (the Disruption)」と呼ばれるこの出来事の根底には、1707 年にスコットランドを併合したイングランド、及びその国教会である英国国教会が、スコットランド国教会に介入する事態への懸念と抵抗があった。このため、同教会には創設者の意図に関わらず、大英帝国の政治的・宗教的中心である「イングランド—英国国教会」に対する、「スコットランド—非国教会派」としての「二重の周縁性」が伴われた。この周縁的アイデンティティは、同教会の信徒の間に帝国の中心的価値である「文明」への強い志向を生み出したと同時に、当時の急速な産業化・都市化に伴われた労働搾取などの社会問題に対する批判意識の原動力ともなった。とりわけ、ムーディが 1880 年代に神学生として学んだ自由教会神学校グラスゴー・カレッジ (Free Church College, Glasgow) からは、キリスト教思想に根付く社会批判を展開する神学者として、アレクザンダー・B・ブルース (Alexander Balmain Bruce, 1831-99) やトマス・M・リンゼイ (Thomas M. Lindsay, 1843-1914) らが登場している。スコットランド自由教会はまた、イングランドへの長老派スコットランド人移民の組織との協力関係の下で、後にムーディが属した宣教団体であるイングランド長老教会の母体となった組織でもある。

以上の背景に基づき、報告者はムーディの植民地支配に対する懐疑的姿勢や、台湾人教会自治運動を受けての宣教師主導論の克服に対して、彼のスコットランド自由教会信徒としての「二重の周縁性」が、いかなる影響を与えたのかを明確化するため、以下の三つの作業を遂行することとした。

- 1) 1843 年のスコットランド自由教会設立前後のスコットランド、及び大英帝国社会思想史に関わる先行研究の検討
- 2) スコットランド自由教会、及びイングランド長老教会の刊行物、教会会議録の調査
- 3) 1880 年代の自由教会神学者による社会批判論考、及びその思想的背景の調査・検討

B. 信仰宣教主義とムーディの宣教論・宣教手法への影響

上述のように、ムーディは在台イングランド長老教会が医療・教育活動、及び教会組織の維持・運営に重点を移行した後にも、街頭や遠隔地の宣教拠点での説教活動を重点的に展開した。こうした宣教手

法の分化は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて見られたキリスト教海外宣教運動の動向を反映している。すなわち、この時期のキリスト教宣教論には、異文化との衝突を避けるべく医療・教育による間接的宣教を行うべきとする考えと、あくまでも「唯一絶対の神への信仰」を直接に伝えるべきとする、上述の信仰宣敎主義という二つの立場が見られた。後者はキリスト教の絶対性を主張することで他宗教への排他性を帯びる危険性を有した一方で、宣教師と現地人との対人的関係性を重視する考えでもあり、ムーディが親和性を示した立場であった。このため、彼は（１）イギリスにおける超教派（宗派の相違を超えた）宣敎集会であるケズィック・コンベンション（Keswick Convention）に参加し、（２）信仰宣敎主義を採用する超教派宣敎団体である中国内陸宣敎会（China Inland Mission）に深い関心を寄せ、その宣敎手法（街頭説教や質素な身なりにより、現地人との距離を縮める努力）を台湾での実際の活動の中で模倣した。

そこで報告者は、これら二つの信仰宣敎に関わる運動が、ムーディの思想形成と宣敎論に具体的にどのように関わっていたのかを検討することで、宗教的他者への排他性の危険性を帯びていた信仰宣敎主義を採りながらも、この問題をある程度まで克服したムーディの位置づけをより明確化することを目指した。同時に、信仰宣敎主義の不採用が在台イングランド長老教会に特異な選択であったのか、あるいはイングランド長老教会組織全体の特徴であったのかを検討するため、ムーディが一時異動により派遣されたシンガポールを含む英領マラヤにおける同教会の宣敎事業を参照点とすることとした。具体的には、以下の三つの作業目標を設定した。

- 1) ケズィック・コンベンションの大会記録、参加回想録を含む一次史料の収集・検討
- 2) 中国内陸宣敎会の刊行物、及び関連研究の調査・検討
- 3) シンガポールを中心とする英領マラヤにおけるイングランド長老教会の活動記録、宣敎報告書類の調査

上記の二点に加え、報告者はムーディのライフヒストリーに関わる史料の収集・検討を実施することを目標とした。

III. 研究・調査実施状況

A. 背景：派遣期間一年目の作業状況

(1) アーカイブ史料調査

以上の問題関心に基づき、報告者は派遣期間の一年目には、アーカイブ史料調査とフィールドワーク作業を重点的に実施した。とりわけ、ムーディの事例の特徴と意味を世界史的な観点、及び地域やキリスト教宗派などの要素により焦点化した観点の双方から捉えるために、報告者は特に以下の四タイプの史資料の収集と検討を行った。すなわち、第一が 19 世紀後半のスコットランド自由教会に関する先行研究である。これらには、1843 年の「大分裂」に至るまでの経緯を、国家と教会それぞれの「法的権威」の及ぶ範囲をめぐる摩擦と議論として捉え、検討した *The Courts, the Church and the Constitution: Aspects of the Disruption of 1843* (Lord Rodger of Earlsferry, 2008)、*Scotland and the British Empire* (Eds. John M. Mackenzie and T. M. Devine, 2011) などが含まれる（研究課題 II.-A.- 1）に相当）。また、これらに関連して、報告者は 19 世紀スコットランド自由教会に属する各地教会の小会や、同教会の総会が任命・設置した委員会の報告書、及び教会刊行物 *Free Church of Scotland Monthly* (1891-93、1900 年分) を調査・収集した。後述するように、これらの史料の中でも *Statement Submitted to the Kirk Session of Free St. John's by the Ladies' Committee for Free St. John's School of Industry* (1870) は、スコットランド自由教会の「二重の周縁性」を考察する上で特に示唆的なものである（研究課題 II.-A.- 2）に相当）。

第二が、上述の信仰宣敎主義に関わる二つの運動、すなわち、ケズィック・コンベンションと中国内陸宣敎会の史資料である。とりわけ、報告者はケズィック・コンベンションの講演録である *The Story of Keswick* を収集し、同集会に J・ハドソン・テイラー (J. Hudson Taylor, 1882-1905) などの中国内陸宣敎会の関係者が関与していたことを確認した（研究課題 II.-B.- 1）及び II.-B.- 2）に相当）。

第三が、イングランド長老教会によるマラヤ宣敎の関係史資料である。これらには、写真、宣教師らの書簡、及び手記 (1887-99、1901-1902、1911-16、1933-42 年分、及び日付不明のものを含む)、各地宣敎拠点／地域（すなわち、シンガポール、ムアル／ジョホール、ペナン、クアラ・ルンプール／セランゴール、ペラなど）に関する報告書、新聞切り抜き、及び英語 (1934-37 年分) と中文 (1953 年分) の教会

刊行物が含まれる（研究課題 II.-B.- 3）に相当）。

第四が、ムーディのライフヒストリー・家族史、及び彼の地域社会との関係性を読み取るための史料である。これらには、Scottish Genealogy Society の Family History Centre、Edinburgh Council Libraries、及び London Metropolitan Archives にて閲覧可能であるムーディ、及び彼の家族構成員の国勢調査記録、出生及び死亡記録、National Library of Scotland にてアクセスが可能である電子アーカイブ British Newspaper Archives に所蔵されている約 30 種の地域新聞のバックナンバー（1883 年から 1950 年までに刊行された *Glasgow Evening Post*、*Edinburgh Evening News*、*Belfast News-Letter*、*Yorkshire Post and Leeds Intelligencer*、及び *Hamilton Advertiser* など）が含まれる。

(2) フィールドワーク

報告者はまた、派遣期間一年目にはムーディのライフヒストリーをより詳細に再構築するための作業として、以下の三地点でのフィールドワークを実施した。すなわち、①グラスゴー（Glasgow）、②レノックスタウン（Lennoxton）、及び③ボスウェル（Bothwell）である。

第一に、グラスゴーでは Free St. John's Church 跡地（教会堂は 1971 年に取壊し）、ムーディが 1890 年から 95 年の間に Free St. John's Church により国内宣教師として派遣され、住み込んだ貧困地区であった Melbourne Street（当時の Hill Street）、Gallowgate、Trinity College（ムーディが 1884 年から 88 年の間に神学を学んだ自由教会神学校グラスゴー・カレッジの後身）、ムーディのもう一つの母校であるグラスゴー大学（1880-84 年在学）を踏査した。第二に、レノックスタウンは、宣教活動から引退した後のムーディと妻のマーガレット（ペギー）・C・アーサー（Margaret (Peggie) C. Arthur, 1891-1959）夫妻が 1929 年前後から 40 年の間に暮らしたグラスゴー郊外の町である。報告者は、ここでは両者が暮らしたとされる Glen Road、ムーディ、及びアーサーの母であるジェーン・カミング・タロック（Jane Cumming Tulloch, 1858-1939）の墓石がある Campsie High Kirk を訪問した。第三に、グラスゴー郊外の町ボスウェルは、ムーディの生まれ故郷である。ここでは、ムーディの生家に隣接していたとされるボスウェル自由教会の跡地、クライド川、ボスウェル城の廃墟、これらに隣接するロンドン宣教会の著名な宣教師デイヴィッド・リビングストン（David Livingstone, 1813-73）の生家である Blantyre を踏査した。

(3) その他の作業

以上の作業に加え、報告者は派遣期間一年目には、ムーディの英文著書の一つである *The Saints of Formosa: Life and Worship in a Chinese Church* (1912) に登場する「Aunt Late」という匿名の台湾人キリスト者の親族で、自身も初代の改宗者・伝道師であった洪卯（茂春）の手稿史料（漢文、及び白話字）の翻刻作業を行なった。同史料は、洪卯の遺族である Karen Ong 女史のご厚意にて入手したものである（Ong 女史は報告者の論文“Campbell N. Moody's Reflections on the Christian Mission” (2014) を読み、報告者に連絡することを決めたとのことである）。また、報告者は the China Centre at the University of Oxford（オックスフォード大学中国センター）及び Ricci Institute for Chinese-Western Cultural History at the University of San Francisco（サンフランシスコ大学リッチ中西文化歴史研究所）の共催による *Historical Legacies of Christianity in East Asia International Workshop*（以下、「オックスフォード・ワークショップ」とする。於オックスフォード大学、2017 年 9 月 20 日～23 日）に参加申請し、招待を受け、これに関わる一連の作業を遂行した。後に、派遣期間二年目の作業 III.-B.- (2) - ③ に詳述するように、同ワークショップは、東アジアにおけるキリスト教の研究に取り組むポストドク研究者、及び駆け出しの大学講師の、英文による博士論文刊行を支援することを目的としていた。このため、報告者を含む参加者は、各自の博士論文や出版書籍の原稿の英訳、加筆・修正を進め、リッチ中西文化歴史研究所とブリル学術出版社が共同刊行する *Studies in the History of Christianity in East Asia* シリーズによる英文著書出版を目指すことが決定された。したがって、報告者は同ワークショップの終了後には、博士論文を大幅に修正することにより刊行した著書『文脈化するキリスト教の軌跡ーイギリス人宣教師と日本植民地下の台湾基督長老教会』（新教出版社、2017 年）の英訳作業を進め、2019 年末までの第一稿の完成を目標に、同作業を継続している。また、2018 年 3 月 27 日には、報告者は受入研究機関である Centre for the Study of World Christianity, School of Divinity, the University of Edinburgh（エディンバラ大学神学部世界キリスト教研究センター）のゼミナールにて研究報告を行い、特に報告者の研究の分析概念である文脈化神学（contextualising theology、派遣期間二年目の作業 III.-B.- (2) - ② に後述）や、聖書翻訳及び文化的・宗教的他者としての宣教師と改宗者の関係性の問題に関する議論を行う機会を得た。

以上のように、派遣期間一年目には、報告者はオックスフォード・ワークショップに関わる作業（準備、参加、及び事後作業としての翻訳）に集中的に取り組んだ関係で、アーカイブ史料調査、及びフィールドワークに割くことのできた時間が多少限られた点是否めない。ただし、全体としては、計画通りの研究作業を遂行することができたと言える。一方で、一年目にはスコットランド自由教会の定期刊行物、地域新聞のバックナンバー、及びイングランド長老教会のマラヤ宣教に関わる史料の収集に力を入れたことから、二年目の作業では特にケズィック・コンベンション、中国内陸宣教会、及び1880年代のスコットランド自由教会神学者らの議論に関わる史料の収集に力点を置くこととした。

B. 派遣期間二年目の作業状況

以上に見てきた派遣期間一年目の作業状況に基づき、報告者は派遣期間二年目の作業として、（１）ムーディの事例の意味をより明確化するためのさらなる史料調査とフィールドワーク、及び（２）これまでの研究と当該プロジェクトの作業の、英文ないし和文による成果発表を行うことを目指した。特に、前者（１）の作業では、一年目の作業にて十分に収集できなかった史料、及びムーディの妻マーガレット・C・アーサーのライフヒストリーと家族史に関わる史料の収集に力を入れることを計画した。

（１）史料調査・フィールドワーク

まず、派遣期間二年目の始まりである2018年6月以来、報告者は主に以下の四タイプの史資料群を収集するため、アーカイブ訪問、及びフィールドワークを実施した。すなわち、

- ① グラスゴーのセント・ジョンズ（後の自由セント・ジョンズ）教会に関わる記録
- ② 1880年代のスコットランド自由教会神学者らによる出版物
- ③ イングランド長老教会のマラヤ宣教に関わる史資料
- ④ マーガレット・C・アーサーに関わる情報、及び史資料

① グラスゴーのセント・ジョンズ（後の自由セント・ジョンズ）教会に関わる記録

第一に、既述のように、報告者は派遣期間一年目の史料調査にて *Statements Submitted to the Kirk Session of Free St. John's by the Ladies' Committee for Free St. John's School of Industry* (1870) を収集し、同史料がスコットランド自由教会関係者らのアイデンティティ、とりわけ周縁者としての経験（「二重の周縁性」）の問題を考察する上で示唆的なものであると判断した。同史料は、報告者が派遣期間一年目のフィールドワークで跡地を訪問した Free St. John's Church, Glasgow（グラスゴー自由セント・ジョンズ教会）が、19世紀初頭に設置した技術学校（具体的な創設年は未詳）における女子教育を、誰がどのように行うべきかという問題を論じるものである。具体的には、同校の創設以来、その女子教育を運営してきたセント・ジョンズ教会女性会（Ladies' Association）が、同教会の男子教育事業を担当していた男性教師による介入に対抗して、女性教師による女子教育の自治を主張する内容となっている。また、同史料はムーディが1890年から95年の間に国内宣教スタッフとして関与していた同教会そのものの歴史的背景を窺い知る上でも有効な情報源であると考えられる。

同史料の意義を明確化するため、報告者は2019年6月21日及び25日に、Glasgow City Archive, the Mitchel Libraryにて、グラスゴー（自由）セント・ジョンズ教会の Session Minutes Books（小会会議録、1819-36年、1852-1913年分）、Managers' Minutes（管理者会議録、1822-40年分）、及び *Statement, Historical and Financial, of the Affairs of Free St. John's Congregation, Glasgow: From the Disruption, May 18, to March 15, 1848* (1848) と題する、同教会の歴史と1848年当時の現状をまとめた冊子を閲覧・収集した。その結果、（自由）セント・ジョンズ教会、及び同教会が創設した技術学校の歴史に関わる主な出来事の経緯の明確化に進展があった。とりわけ、同校が自由セント・ジョンズ教会におけるトマス・チャーマーズ (Thomas Chalmers, 1780-1847) の牧会時期 (1819年9月～1823年11月) に、彼の女子教育思想に基づいて設置されたという、これまで広くは知られていなかった事実を明らかにすることができた。チャーマーズは上述の「大分裂」を率先した、スコットランド自由教会の中心的な創設メンバーとして知られる人物である。同時に、報告者はこのアーカイブ史料調査によって、次の五つの点に関わる事実関係を明らかにした。(a) 自由セント・ジョンズ教会女性会の役割（技術学校を資金的・人的に支える自由セント・ジョンズ教会の女性信徒らから構成される、同校の運営決定機関）、(b) 1930年代半ばから1848年までにかけての同校の大体の生徒数とその年齢層（12、3歳の者が100名強）、(c) 同校で提供された教科課程（聖

書、及び裁縫・編物を含む技術教育)、(d) 自由セント・ジョーンズ教会女性会と、同教会の男子教育事業に加えて女子教育をも担うことを目指した男性教師ジョン・クレイギー (John A. Craigie, 生没年不詳) との間の長期間にわたる確執の経緯、及び (e) 同教会の女性委員会 (Ladies' Committee) の性格 (同教会女性会とジョン・クレイギーとの間の摩擦に対処するために、同教会の小会によって特別に任命・組織された委員会)。以上のように明らかとなった事実に基づき、報告者は和文による史料紹介文「自由セント・ジョーンズ技術学校女性委員会による自由セント・ジョーンズ教会小会への意見書」(1870 年)を読む」を執筆・投稿した。以下、**派遣期間二年目の作業 III. - B. - (2) - ①**にも述べるように、同稿は同志社大学人文科学研究所の紀要『キリスト教社会問題研究』第 67 号 (2018 年 12 月)、pp. 105-131 に査読付にて掲載された (**研究課題 II. - A. - (2)**) に相当)。

② 1880 年代のスコットランド自由教会神学者らによる出版物

19 世紀後半、特に 1880 年代のスコットランド自由教会の神学者らによる出版物の収集は、派遣期間一年目に残された課題の一つであった。したがって、報告者は二年目の作業として、ムーディ自身が深く影響を受けたと回想している自由教会神学者及び教育者である、上述のアレクザンダー・B・ブルース、トマス・M・リンゼイ、及びヘンリー・ドラモンド (Henry Drummond, 1851-97) の三名が発表した論文、書籍、説教集の包括的リスト化に取り組んだ。これらの史料は、主に National Library of Scotland、エディンバラ大学 New College Library (神学部) と Main Library、及び東京神学大学図書館 (**派遣期間二年目の作業 III. - B. - (2) - ②**) に後述するワークショップ報告のための 2018 年 11 月 20 日～26 日の一時帰国中に訪問) にてアクセス可能であった。リスト化作業では、報告者は原文、翻訳書、共著を含むブルースの史料 45 点、リンゼイのもの 26 点、及びドラモンドのもの 52 点の異なる形式 (紙媒体／電子媒体)、異なる版 (1820 年代から 2000 年代までに刊行されたもの) の各図書館における所蔵状況を確認した。また、このうち報告者は 1880 年代に発表された聖書注解や説教集を中心とするブルースの史料を 30 点、リンゼイのものを 7 点、ドラモンドのものを 8 点収集した (**研究課題 II. - A. - (3)**) に相当)。今後の作業では、これらの史料を検討し、ブルースらの同時代の社会問題に対する見方、それらを支えた宗教的・思想的背景を捉え、これらがムーディの思想形成に及ぼした影響を考察してゆくことを目指す。

③ イングランド長老教会のマラヤ宣教に関わる史資料

報告者は、イングランド長老教会のマラヤ宣教の特徴と意義をより詳細に考察するために、派遣期間一年目に収集した史料を整理し、以下の四つの問題を検討することとした。(a) イングランド長老教会海外宣教委員会によるマラヤ宣教への資金的・人的支援の状況とその変遷、(b) 同ミッションの「中国宣教」への使命感の強調と (a) との関係性、(c) 在マラヤ宣教師らの現地人教会の自治への姿勢 (現地人伝道師・牧師の人数、教会自治運動、信仰宣教主義に対する考え方を含む、神学的・宣教論的傾向) に対する (a) の影響、(d) 宣教手法、教会運営、及び宣教師＝改宗者間の関係性に対する大英帝国の植民地支配の影響。

このうち、報告者はまず課題 (c) を実施し、派遣期間二年目の史料収集に備えた。具体的には、イングランド長老教会が 1901 年から 31 年の間に英領マラヤ各地に有した伝道所と教会堂をリスト化し、これら各宣教拠点の民族構成 (マレー語を母語とするプラナカン、及び福建系、汕頭系、海南系、及び客家系の漢族移民を含む)、信徒数、牧師 (現地人牧師と宣教師を含む)・伝道師・女性伝道師 (bible women) らの固有名などの情報を含む一覧表を作成した。その結果、報告者はムーディが 1901 から 1902 年の間に関わった福建系移民の教会である Tanjong Pagar 教会が、比較的早期と言える 1903 年に現地人牧師 Tay Sek Tin (漢字名、及び生没年未詳) を招聘した一方で、他の教会、とりわけ他のイングランド長老教会宣教師が関与した汕頭系移民の教会では、現地人牧師の招聘が 1929 年以後に実現していることが明らかとなった。また、プラナカン系教会である Prinsep Street 教会では、1930 年時点でも宣教師の主導下にあることが確認された。一方で、これらの教会における宣教師＝改宗者間の関係性、現地人教会自治への志向、及びその動きの有無や性格を考察するためには、青年会、読書会、教会雑誌の刊行などに関わった、聖職者ではない現地人リーダーらの活動を追う必要があると考えられる。

以上の背景に基づき、報告者は 2019 年 1 月 20 日～30 日、及び 3 月 27 日～4 月 3 日の二度にわたり、ロンドンとケンブリッジでのアーカイブ史料調査を集中的に実施した。その際、特に次の二つの作業目標を設けた。第一に、イングランド長老教会のマラヤ宣教が、同教会の海外宣教委員会によってどの程度の資金的・人的支援を受け、またそれがどのように変遷したのかを捉えるために、同ミッションに関

する基本情報をより広く収集すること。第二に、台湾及びマラヤにおけるムーディの宣教事業との比較検討に有効と考えられるケースを見出すために、何名かの在マラヤ宣教師らに焦点を当てた情報収集をすること（研究課題 II. - B. - 3）に相当）。

まず、イングランド長老教会のマラヤ宣教に関する基本情報を収集するために、報告者は主に次の四タイプの史料を調査した。(a) Archives of Westminster College, Cambridge が作成した在マラヤ宣教師の FASTI ファイル（個々の宣教師に関連する写真、書簡、追悼文を含む新聞記事、教会刊行物の記事などの関連史料が含まれる）。(b) *Synod of the Presbyterian Church of England*（『イングランド長老教会大会』、1880-91 年分、1898-1906 年分）、イングランド長老教会の Foreign Mission Executive Committee（海外宣教執行委員会、Joint-Conference of Representatives of Women's Missionary Association and Foreign Mission Executives（女性宣教会及び海外宣教委員会代表合同会議）を含む、1911-19 年分）、*Scottish Auxiliary of the China Mission in Connection with the Presbyterian Church of England*（スコットランド中国宣教（イングランド長老教会関係）補助財団、1855-1900 年、1906-30 年分）などの会議録と報告集。(c) 宣教師と海外宣教委員会スタッフの報告書簡（在マラヤ宣教師の一覧、私信や報告書からの抜粋文、及び統計表なども含む、1906 年、1948-51 年、1959-69 年分）。(d) シンガポールのキリスト者リーダーである Song Ong Siang（宋旺相/宋鴻祥、1871-1941）の英文著書 *One Hundred Years' History of the Chinese in Singapore*（1923）を含むその他の史料。報告者はこれら四タイプの史料を検討することで、在マラヤ・イングランド長老教会宣教師らの背景、及び同ミッションの「中国宣教」との関わり方を捉えることを目指す。同時に、同ミッションのマラヤにおける人員・財政状況を詳細に捉え、現地人キリスト者の自己認識や、大英帝国による植民地支配、西洋教育、キリスト教、及びこれらの現地社会との関係性に対する考え方を読み取ることを目的としている。

次に、ムーディの事例との比較検討に有効と思われる在マラヤ宣教師らに焦点をあてた史料調査を行うため、報告者はマラヤ宣教に関与したイングランド長老教会宣教師らをリスト化し、その中でも特に、ムーディとの接点を有したジョン・A・B・クック（John Angus Bethune Cook, 1854-1926）、及びウィリアム・マレー（William Murray, 1867-1946）の二名に着目した。同ミッションの汕頭語スタッフであったクックは、一時異動により 1901 から 1902 年の間に福建語（閩南系台湾語）スタッフとしてシンガポールで活動していたムーディの同僚であった。これまでに収集したシンガポール活動期のムーディの書簡から、報告者は彼とクックとの間に意見や手法の相違があったことを確認している。例えば、他の在シンガポール英国人との交流のためにクックが日課としていた茶を飲む休憩時間を、ムーディは集中的な街頭説教活動への妨げと見なしていた。同様に、何の苦もなく人力車を利用していたクックに対し、こうした生活様式が宣教師と現地の人々との間の断絶を深めると考えたムーディは、その利用を意識的に避けていた。こうしたクックとムーディの相違は、信仰宣教主義—とりわけ、現地社会の文化を取り入れつつ街頭説教を展開し、意識的に現地の人々との近接を試みていた中国内陸宣教会の手法—に対する両者の姿勢を考察する上で、重要な示唆を与えるものであると言える。

一方で、マレーとムーディとの接点はやや間接的なものであった。しかしながら、この両者はある時点に至るまで比較的に類似した道筋を辿っていた。ムーディは 1865 年にグラスゴー郊外ボスウェルにて生まれ、グラスゴー大学（1880-84 年在学）、自由教会神学校グラスゴー・カレッジ（1885-88 年在学）で学び、見習牧師（Moffat, Parsons Green、及び Dumfriesshire、c.1882-90 年）、グラスゴーにおける国内宣教（1890 年以後）を経て、台湾の宣教師となった（1895 年以後）。マレーは 1867 年にグラスゴーに生まれ、グラスゴー大学（1889 年卒業）、ロンドンのクイーン・スクエア・ハウス長老教会カレッジ（在学時期未詳）で学び、イングランド長老教会牧師として Crook, Darlington, Northumberland, Leeds、及び Bournemouth などのイングランド各地（牧会時期未詳）、及びマラヤの Penang 教会（1893-99 年）での牧会を経て、1902 年に同教会マラヤ宣教のマレー語スタッフとして任命された。マレーの在マラヤ宣教師としての任命は、同年のムーディのマラヤから台湾への再異動に関わって決定されたことであった。ムーディとは異なり、マレーは宣教師文書をほとんど出版しなかったが、今回のアーカイブ訪問により、報告者は彼が主に英語とマレー語の説教原稿を多く残していたことを発見した。今後の作業では、これらの史料を検討し、マレーの神学的立場や、その改宗者らに対する姿勢との関係性を明確化することを目指す。その上で、マレーとムーディの神学・思想的背景、宣教論及び宣教手法に対する考え方や、民族的・文化的・宗教的他者、大英帝国及び日本による植民地支配に対する姿勢を比較検討してゆくことを目指す。

④ マーガレット・C・アーサーに関わる情報、及び史資料

派遣期間の一年目以来、報告者はムーディのライフヒストリー、及び家族史への調査の一環として、彼の妻であり、彼の伝記 *Campbell Moody: Missionary and Scholar* (as 洪伯祺《聚珍堂史料4 宣教學者梅監務》(Tainan: Taiwan Church News, 2005)) の著者でもあったマーガレット・C・アーサーに注目してきた。とりわけ一年目に実施した地域新聞のバックナンバーの調査により、アーサーが地域社会や教会の活動に活発に参加し、リーダーシップを発揮した人物であったことが明らかになった。また、彼女の家族構成員の国勢調査、出生及び死亡記録を確認することで、アーサーが聖職者・軍人、教会や宣教運動に関わる女性リーダーを輩出した、イングランド及びカナダへのスコットランド系移民の家庭に属していたことを確認した。彼女の母である上述のジェーン・カミング・タロックは、ロンドン・ゴードーズグリーンズのイングランド長老教会である St. Ninian's Presbyterian Church, Golders Green (以下、「セント・ニニアンズ」とする) に、最初の女性長老として深く関与した人物であった。マーガレット・C・アーサー自身も、1940年にグラスゴー郊外レノックスタウンにて夫ムーディを亡くした後、故郷ゴードーズグリーンズに戻り、同年にセント・ニニアンズの長老に任命され、1948年にはイングランド長老教会の女性宣教会会長となったことも確認した。

以上の事実関係に基づき、報告者はアーサーの女性宣教会会長としての活動に関わる文書の収集を継続した。同時に、報告者は派遣期間の二年目より、彼女の埋葬地を探索し始めた。報告者の知る限り、その位置はイングランド長老教会の協力によって創設された台湾基督長老教会の関係者、及び多くの現代イギリス人の間でも知られていない。そこで、報告者は上述の二度にわたるロンドン・ケンブリッジでのアーカイブ訪問を行った、2019年1月20日～30日、及び3月27日～4月3日の間に、集中的にフィールドワークを実施し、これまで広くは知られていなかったアーサーに関わるいくつかの事実関係を明確化した。

第一に、報告者は2019年1月24日に Barnet Local Studies and Archives を訪問し、セント・ニニアンズの Session Minutes Books (小会会議録、1928-46年、1955-62年分)、Communicants' Roll Book (教会員名簿、1950-59年分)、Women's Missionary Association Minutes (女性宣教会会議録、1944-48年分) を収集した。この作業により、報告者は同教会とムーディ・アーサー夫妻の接点を明確化した。その結果、おそらくは同教会とアーサー家との関係、及び同教会が彼女の故郷に隣接していることを背景に、休暇のために台湾から帰国していたムーディ・アーサー夫妻が、1933年前後にはゴードーズグリーンズに滞在し、同教会の礼拝及び小会に参加していたことが確認された。セント・ニニアンズの小会会議録によれば、ムーディは同年7月2日の小会に参加し、閉会のスピーチをしている。また、1940年2月末に彼が没した際には、同年3月3日の小会でアーサーに対する哀悼の意が特別に記録された。同史料はまた、アーサーが夫の死後故郷に戻り、早くも10月26日の小会では彼女の同教会の長老候補としての推薦に関わる議論がなされ、12月1日には正式な任命がなされたことを示している。また、報告者はアーカイブスの Hugh Petrie 氏の協力を得て、地域新聞に掲載されたアーサーの追悼記事 (*Hendon & Finchley Times*, 18th December 1959) を入手した。これによれば、アーサーは1959年12月9日に没し、その葬儀は同月12日にセント・ニニアンズで執り行われ、遺体はゴードーズグリーンズ火葬所にて火葬された。このため、報告者は同火葬所を訪問してアーサーに関わる記念碑ないし記念樹を探索し、翌25日には火葬所の記録を確認することで、彼女が確かに1959年12月12日に同所で火葬され、その遺灰は他所に埋葬されたとの記録を確認した。その場所については、残された派遣期間の間に突き止めることができなかったが、おそらくはハムステッドで没したアーサーの父ヒュー・R・アーサー (Hugh Rose Arthur, 1851-1911) が埋葬された墓地を当たる必要があると考えている。

第二に、報告者は1979年にセント・ニニアンズと Golders Green Methodist Church (ゴードーズグリーン・メソジスト教会) が合同することで設立された Trinity Church, Golders Green (以下、「トリニティ教会」とする) の Sally Bateman 牧師に連絡を取り、2019年3月31日の日曜礼拝への参加と、同教会に元セント・ニニアンズの信徒でマーガレット・C・アーサーに関する記憶を持っている方がいれば、会って話を聞くことを希望しているとの旨を伝えた。これに対して、セント・ニニアンズの信徒で、現在トリニティ教会の歴史家でもある Janet Morrison 女史に、3月31日の礼拝後に報告者のためアーサーに関わる情報を教示するように依頼したとの Bateman 牧師の返信を受けた。訪問の当日、報告者は Morrison 女史よりご著書である *Trinity Church Golders Green, 1911-2011* (Lavenham: Lavenham Press, 2012) を譲り受け、彼女が幼少期にはセント・ニニアンズでマーガレット・C・アーサーをよく見かけていたとのこと、最後に会ったのは1959年の女史の堅信礼の際であり、予てから体調不良に苦しんでいたらしきアーサー

が、セント・ニニアンズの長老として参加し、女史を含む堅信礼を受けた信徒らと握手をしてくれたとのことを窺った。Morrison 女史はアーサーの葬儀にも参列したが、残念ながら彼女の火葬、及び埋葬場所については記憶していないとのことであった。女史の祖父 James C. Steward 氏とアーサーの兄「ジャック」ことジョン・アーサー (John Arthur, 1882-1915) は、共にセント・ニニアンズの創設メンバーであった。このため、Morrison 女史はアーサー家、とりわけマーガレット (「ペギー／ペグ」) の姉で、女史のご両親が通った学校の教師でもあり、1968 年 3 月の女史の結婚式にも参列した「モリー」ことメアリ・H・アーサー (Mary Hay Arthur, 1888-??) とは、家族ぐるみで親しく交流していたとのことである。また、女史によれば晩年のマーガレット・C・アーサーはゴードーズグリーン Dingwall Gardens の姉メアリの家に暮らし、兄ジョンの未亡人であったメイ・L・マッケンジー (May Louise Mackenzie, c.1881-??) もその隣家に暮らしていたとのことである。

また、報告者は Morrison 女史、及びトリニティ教会の Encar Manalili 女史の案内を受け、同教会に保管されているアーサー家と関連する元セント・ニニアンズの資料を確認した。これらの資料には、同教会出身の八名の第一次世界大戦出兵・犠牲者の名を刻んだオルガン設置記念額が含まれており、この八名の一人がジョン・アーサーであった (ゴードン・ハイランダー第八大隊少尉)。このため、トリニティ教会はアーサー家がジョンを記念してセント・ニニアンズに寄贈した聖書朗読台も保管している。さらに、セント・ニニアンズの礼拝堂の十字架は、ジョン、メアリ、マーガレット・アーサーの母であるジェーン・カミング・タロックを記念するために、アーサー家が寄贈したものであることを記述する記念額もあり、同資料はタロックがセント・ニニアンズの教会員で会った時期 (1912-39 年)、及び長老に任命された年 (1925 年) も表記している。報告者はまた、Morrison 女史のご家族の写真アルバムを見せてもらったが、その中には彼女の祖母とアーサー家 (少女時代のマーガレットや、青年時代のジョンとメアリ、彼らの母親であるタロックを含む) 写真が複数枚含まれていた。

以上の見聞により、報告者はアーサー家がセント・ニニアンズと深く関与してゆくようになった経緯を、仮説的に次のように捉えた。すなわち、1910 年前後にはおそらく既に独立していた一家の長男ジョン・アーサーが、まずは同教会の創設に関わり、1911 年に家長であった父親のヒュー・R・アーサーが没した後、その未亡人となったジェーン・カミング・タロックとジョンの妹らが同教会の近隣に引っ越し、1912 年には同教会の教会員となった。1925 年にタロックは長老に任命されたが、それはムーディとマーガレット・C・アーサーが体調を崩し、休暇で台湾から帰国し、ゴードーズグリーンにて療養していた時期と重なる。このことから、この時期のムーディ・アーサー夫妻がアーサー家の親戚宅に滞在していた可能性を指摘できる。

以上の情報と仮説に基づき、報告者は 4 月 1 日に再び Barnet Local Studies and Archives を訪問し、関連史料を収集した。具体的には、セント・ニニアンズの Session Minutes Book (小会会議録、1910-28 年、1938-46 年分) から、ジョン・アーサーの同教会との関わり、同教会へのジェーン・カミング・タロックとその子どもらの移籍、及びタロックの長老としての任命などに関わる記載を確認した。その結果、報告者はジョンがセント・ニニアンズ「地域委員会」のメンバーとして同教会の創設を推進したことを示す記載を確認した (1910 年 12 月 20 日、1912 年 1 月 12 日など)。トリニティ教会に保管されている記念額の記載とは異なり、ジェーン・カミング・タロック、及びマーガレットを含む子どもらの (St. John's Wood Church からの) 同教会への移籍は、「1912 年」ではなく 1911 年 10 月 20 日付で記録されていた。一方で、タロックが 1925 年に長老に任命されたとの記念額の記載と小会会議録の記載は一致していた (1925 年 11 月 1 日の会議録には、長老に選出された場合には喜んでその任を果たすとのタロックの意思表示が記録されており、同月 24 日には推挙を、12 月 20 日には正式に任命されたとの記録が見られる)。

同時に、報告者は Petrie 氏の協力を受け、国勢調査記録、郵便局要覧、選挙人登録簿 (1901-28 年分) を閲覧し、マーガレット・C・アーサーの幼少期の一家の動きを確認した。その結果、一家がロンドン内で複数回移動していることが明らかとなった。例えば、マーガレットが生まれた 1891 年には、一家はヘンドン (Burton Road, Willesden) に、1901 年にはブレント (158 Willesden Lane) に暮らしていたこと、1911 年にはハムステッド (9 Frognal Mansions) に暮らしていた一方で、ジョンは新婚の妻メイと共にバーネット (Kinnoull, Hampstead Way, Golders Green) に暮らしていた。1918-22 年にかけて、タロックもまたバーネット (7 St. John's Road, Golders Green) に暮らし、1923 年にはここに長女のメアリが加わった。1926 年以来、タロックはバーネットの新住所 (21 Dingwall Garden, Golders Green) に移動している。以上の情報により、報告者はアーサー家の移動状況、セント・ニニアンズとの地理的距離の変遷を確認する

ことができた。今後の研究では、これら各地点の社会史的背景をも確認することで、一家の社会移動の状況を分析する必要があると考えている。また、以上の作業を基盤に、今後もマーガレット・C・アーサーのライフヒストリー研究を継続し、将来的には彼女に関する伝記的研究をまとめ、その成果をトリニティ教会、及び *Barnet Local Studies and Archives* に感謝の念を込めて寄贈することを計画している。

（２）研究発表活動、及びその準備活動

次に、派遣期間二年目には、報告者は和文史料紹介文（一本）、日本語による一般公開ワークショップでの報告（一本）を発表し、英文による発表（著書一本、及び論文集に寄稿する章一本）に関わる準備作業を進めてきた。具体的には、以下の成果発表、及びその準備作業を進めている。

- ① 自由セント・ジョンズ教会技術学校に関する史料紹介文（和文）
- ② 一般公開ワークショップでの台湾キリスト教史に関わる報告（日本語）
- ③ 和文著書の英訳版出版のための準備作業（英文）
- ④ 東アジア聖書翻訳史に関する論文集に寄稿する台湾のケースに関わる章の執筆（英文）

① 自由セント・ジョンズ教会技術学校に関する史料紹介文

上述のように、報告者は派遣期間一年目に収集した文書の一つである *Statements Submitted to the Kirk Session of Free St. John's by the Ladies' Committee for Free St. John's School of Industry*（1870）に特別に着目し、*Glasgow City Archive, the Mitchell Library* にて関連史料の調査を実施した（上記 **派遣期間二年目の作業 III.-B.-（１）-①**）。その上で、同史料の全文を和訳し、グラスゴー自由セント・ジョンズ教会及びその技術学校の略歴、同史料の背景（すなわち、同教会の男子教育事業を担当していた男性教員クレイギーが、それまで同教会女性会が女性教区民への宗教・技術教育を自治的に実施してきた技術学校の教育方針に介入しようとした問題の経緯）を含む史料紹介文を執筆した。報告者は、特に同教会の女性会が、それ自体周縁性を帯びていたスコットランド自由教会の組織内で有していた周縁性に着目し、同史料が当時のスコットランド社会における女子教育の状況だけではなく、スコットランド自由教会関係者の自己認識（「イングランドー英国国教会」に対して有していたと考えられる「二重の周縁性」の問題を含む）の性格を考察する上で示唆的なものであることを指摘した。

既述のように、同史料紹介文は査読の上、「自由セント・ジョンズ技術学校女性委員会による自由セント・ジョンズ教会小会への意見書」（1870 年）を読む」として、同志社大学人文科学研究所の紀要『キリスト教社会問題研究』第 67 号（2018 年 12 月）、pp. 105-131 に掲載された。

② 一般公開ワークショップでの台湾キリスト教史に関わる報告

報告者は、国際基督教大学アジア文化研究所（以下、「IACS」とする）、及びキリスト教と文化研究所の共催による、一般公開ワークショップ「アジアと向き合うキリスト者：その歴史と未来ー武田（長）清子を記念してー」の招待を受け、「歴史を問い歴史に問われるキリスト教：宣教師ムーディと日本植民地下の台湾基督長老教会」と題する報告を発表した（於国際基督教大学、日本東京都三鷹市、2018 年 11 月 24 日）。同ワークショップは、戦後のキリスト教知識人であり、同年 4 月に没した IACS の元研究所長であった武田清子（1917-2018）を記念する目的で開催された。武田は、帝国主義的植民地支配や侵略という挫折的な歴史経験を経て、諸々の政治システムとイデオロギーのせめぎ合いを見た戦後 1950 年代のアジア社会を前に、キリスト教が独自に果たし得る使命と意味を模索した思想家であった。彼女の思想の根底には、日本人と他のアジア諸国の人々との関係性への問題意識が横たわっており、それは彼女の戦前以来の経験、とりわけ 1939 年にアムステルダム世界キリスト者青年会議に参加し、中国人キリスト者らと直面した経験と深く関わるものであった。

重要なことに、武田は同会議にて、当時英国ケンブリッジ大学ウェストミンスター・カレッジで神学を学んでいた台湾人神学生で、後に牧師・神学教育者、また上述した本研究の分析概念である文脈化神学の提唱者として知られるようになる黄彰輝（1914-88）と出会っている。文脈化神学とは、キリスト教のメッセージとしての「テキスト（Text）」と、特定の歴史的時と場である「コンテキスト（context）」の双方向的な関係性を重視する神学思想である。換言すれば、それは「テキスト」がキリスト者らに社会不正義などのコンテキストの問題を直視し、批判的に問うための根拠と原動力を提示すると同時に、特定の歴史的状況たる「コンテキスト」が、そのただ中において「テキスト」が持ち得る意味を再考し、再確認することをキリスト者に促すような関係性である。黄彰輝は、日本による台湾の植民地支配、及び

それに続いた国民党政府による台湾接收後の支配体制が、いずれも台湾の人々を文化的・言語的に抑圧し、差別する状況を目の当たりにする中で、キリスト教のメッセージとしての「テキスト」の意味を再考し、キリスト者は人格的尊厳、自決、及び社会正義を追求する者であるべきことを主張した。こうした黄彰輝の思想は、1970年代以後の台湾基督長老教会関係者による台湾民主化運動とも密接に関わっている。黄彰輝はまた、父・黄俟命（1890-1950）が台湾中部の彰化で伝道師としてムーディと共同宣教を行っていた時期に、ムーディから幼児洗礼を授かった人物でもある。

同ワークショップ報告では、報告者は上記の事実関係を出発点に、黄彰輝の文脈化神学をムーディの事例－彼の台湾及びマラヤにおける宣教経験、とりわけ 1920 年代から 30 年代の台湾人教会自治運動との出会いが、彼のキリスト論、及び宣教論の変容に対して及ぼした影響－を検討する分析枠組として有効なものであることを説明した。同時に、報告者は同発表にて、台湾人キリスト者らが、その教会自治運動と密接に関わる形で提示していた聖書解釈、キリスト論、及び教会形成論などの神学議論を紹介した。その上で、日本植民地下台湾を生きたキリスト者ら（ムーディのような宣教師と台湾人改宗者の双方を含む）によるこうした神学的格闘作業こそが、後の文脈化神学の着想へと繋がった、すなわち文脈化神学への文脈を形成したことを指摘した。

一般聴衆にも公開されていた同ワークショップでは、報告者を含む八名の研究者が招待され、それぞれの専門分野に基づく研究発表を行った。これらの発表には 19 世紀の中国人キリスト者知識人、太平天国、日朝及び日中関係に関わる問題、満州国における宗教統制、武田清子と中国教会の関係性、及びアメリカ沖縄統治期の土地問題に対する米国メソジスト教会宣教師らの姿勢の問題を含む、多岐にわたるトピックが含まれていた。発表の後には企画者、報告者、及び参加聴衆を含む活発な議論がなされ、今後報告者が本研究の議論を深め、東アジア・キリスト教思想史に関わる他の研究者らとのより密接、且つ活発な学術交流を継続してゆくためのきっかけとなった。

③ 和文著書の英訳版出版のための準備作業

既述のように、報告者は派遣期間一年目にオックスフォード・ワークショップ、すなわち *Historical Legacies of Christianity in East Asia International Workshop*（於オックスフォード大学、2017 年 9 月 20 日～23 日）に招待され、参加した。同ワークショップはヘンリー・ルース財団が出資し、サンフランシスコ大学リッチ中西文化歴史研究所が運営している四年間のプロジェクト“*Historical Legacies of Christianity in East Asia: Bridging a New Generation of Scholars and Scholarship*”の一環で実施されたものである。2017 年度のワークショップはリッチ中西文化歴史研究所、及びオックスフォード大学中国センターによって共催され、報告者を含む七名の参加者は、四日間の開催期間中に各自の博士論文の原稿（報告者の場合は、著書の一部を英訳したもの）に基づく研究報告を行い、ワークショップの終了後には、参加者らはリッチ中西文化歴史研究所、及びブリル學術出版社が共同刊行している *Studies in the History of Christianity in East Asia* シリーズでの英文著書の出版を目指し、各自原稿の翻訳、加筆・修正作業を進めることが取り決められた。このため、上述のように、報告者は 2019 年末までに著書の英訳作業を一通り終えることを目標に、翻訳作業を継続してきた。

派遣期間二年目には、アーカイブ史料調査、フィールドワーク、及び他の出版・発表活動の準備に力を入れたため、本翻訳作業のスピードは一年目のそれに比してやや遅くなったことは否めない。一方で、報告者はこれまでに序論の一部、第一章の一部、第四章、及び第四章補論（およそ 86,900 単語）の翻訳を終えた。これは全原稿の約半分に相当する。本研究を国際的な議論の場により開かれたものとするためにも、引き続きの翻訳作業が急がれる。

④ 東アジア聖書翻訳史に関する論文集に寄稿する台湾のケースに関わる章の執筆

報告者は、上記オックスフォード・ワークショップを契機に研究交流を開始した Giulia Falato 博士（Departmental Lecturer in Chinese, University of Oxford）より、東アジア聖書翻訳史に関する論文集 *Missionary Translators: Translation of Christian Texts in East Asia*（仮題）への寄稿を打診され、執筆企画書を作成・提出した。同企画は未だ初期段階にあり、未確定な部分が多いが、現時点までに Giulia Falato 博士、及び Jieun Kiaer 博士（Associate Professor in Korean Language and Linguistics, University of Oxford）がそれぞれ一つの章を寄稿することが決まっており、両者が報告者の執筆企画書を確認した後、報告者も執筆陣に加わり、一つの章を担当することとなった。また、2019 年 10 月には執筆陣会議を行うことが計画されている。同書では、東アジアの異なる地域（中国、朝鮮、日本、及び報告者が加わることによって追

加された、台湾)における聖書翻訳に関わる事例を、歴史学的ないし言語学的に検討することが計画されている。報告者は19世紀以来の漢字文化圏における宣教文書翻訳に関わって議論されてきた文字・文体・言語の選択(漢字/ローマ字表記、文語体/口語体、北京官話/各地域の方言)をめぐる論争を概観した上で、具体的には在台イングランド長老教会宣教師キャンベル・N・ムーディ、及びトマス・バークレイ(Thomas Barclay, 1849-1935)による新約聖書「ローマ人への手紙」の閩南系台湾語訳テキストを比較検討する論考を執筆することを計画している。

以上のように、派遣期間二年目が開始した2018年6月以来、報告者は特に次の二つの研究作業に力点を置いてきた。第一が、キャンベル・N・ムーディの事例の意味をより明確化するためのアーカイブ史料調査とフィールドワークである。とりわけ、ムーディのスコットランド自由教会信徒・神学生・聖職者としての背景や、信仰宣教主義との関係性に焦点を当てつつ同作業を実施した。また、ムーディのライフヒストリーをより詳細に分析する一環として、報告者は彼の妻マーガレット・C・アーサーに関する伝記的研究を本格化した。第二が、報告者のこれまでの研究、及び派遣期間中の作業の成果の発表活動である。

派遣期間一年目には、全体としてオックスフォード・ワークショップに関わる準備、参加、及び事後作業のために、アーカイブ史料調査とフィールドワークに割くべき時間がある程度制約された。これを受け、報告者は二年目にはこれらの作業に力点を置くことで、以下に再確認する本研究の二つの主な目的を遂行するために不可欠な史資料にアクセスすることができた。すなわち、(1) 宣教団体としての在台イングランド長老教会の性格を明らかにすること、及び(2) 19世紀末スコットランド社会におけるムーディの思想形成の過程を検討することである。収集した史料の中には、1880年代のスコットランド自由教会神学者らの刊行物、19世紀から20世紀にかけて在マラヤ・イングランド長老教会宣教師らが書き残した手稿史料など、英国外では入手が困難であり、報告者の今後の研究に欠かせないものも多く含まれている。一方で、計画したほどには包括的に調査できなかったものの、報告者は派遣期間二年目には、中国内陸宣教会に関わるいくつかの史資料も閲覧、収集してきた。

また、派遣期間二年目には、報告者は二つの日本語・和文による報告・出版を通し、東アジア・キリスト教史に携わる日本の研究者との議論の機会を持つことができた。その一方で、現在取り組んでいる著書の英訳作業、及び東アジア聖書翻訳史の論文集への寄稿を含む、英語・英文による発表・出版のための準備作業については、今後より力を入れる予定である。このほか、現時点では、具体的にはエディンバラ大学が刊行している学術誌である *Studies in World Christianity* への論文投稿を検討・準備している。これらの活動を通して、報告者は今後、本研究をより広い国際的な読者層にアクセス可能なものとし、多くの議論、意見、及び批判に開かれたものとしてゆくことを計画している。